今月の窓

協同組合の今日的役割

「協同組合の今日的役割」を考えるのであれば，そもそも今日の社会がどのように位置づけられ，どのような問題を内包しているのか，という問いがまず必要となろう。本号の小野澤研究員の論稿は，国民的な資金循環構造の変化という切り口から，現代社会の一面を明らかにすることを試みたものである。そこであげられている「金融化」という概念は，現代社会をとらえる一つの側面として有益なものであろう。1980年，レイドローは「西暦2000年における協同組合」において，来るべき新自由主義，多国籍企業の本格的展開を予想し，それに対抗すべき協同組合の「思想の危機」を説いた。現在の「金融化」は，まさにレイドローの予見した新自由主義の世界的な展開と密接な関係を有するものである。

18世紀のヨーロッパにおいて協同組合主義が勃興（ぼっこう）した際にも，当時の産業革命と市場化がもたらした労働者・農民の悲惨な生活がその背景にあった。しかし，現代における市場機能への偏重は，産業革命以降の市場化と対比しても大きく変容しているように思われる。それは，かつての市場，企業活動が，基本的には国家の枠組みの中に位置づけられたものであったのに対し，現代において進行しつつある国際的な市場化が，まさに，国家とは「異次元」の存在として，自己増殖的な活動を展開しているように感じられる点である。国家が市場を制御するのではなく，むしろ目に見えない市場という存在が国家の政策を動かしているようにすら感ずる。

近年の地球環境問題の深刻化，原発による放射能汚染問題，遺伝子組換え作物による生態系破壊への懸念などに接する時，人類は自らが制御不可能な領域に足を踏み入れているのではないかという強い危惧を抱く。しかし，これらの問題に共通する背景には，金銭的価値を唯一の価値尺度とし，企業価値の最大化を行動原理とする市場メカニズムが存在する。人類が生み出し，制度化し，利用してきた「市場」という極めて優れたメカニズム自体が，我々の気付かないうちに制御不能の存在となりつつあるのではないかという不安感を覚えるのである。

今日における協同組合は，こうした市場メカニズムが自らを貫徹しようとする社会において，その存在意義を主張し，実践していかなければならない。そのことには多くの困難さを伴うが，本号における重頭研究員，斉藤教授の論稿は，現代社会において協同組合が優れた存在価値を示しているフランス，日本の事例を紹介している。そこには今後の協同組合のあり方について非常に重要と思われる運動の方向が示されているように思われる。

一つは，重頭の論稿に見られるフランスの協同組合銀行と市民団体（アソシエーション）の連携であり，一つは斉藤教授の論稿に見られる「共同生産」（co-production），「共同統治」（co-governance）という概念である。市場化が貫徹された現代の社会において協同組合がその真の役割を主張していくためには，協同組合間，さらには多くの市民団体等との連携により，その力を結集していくことが極めて重要であろう。また，そうした市民の力を集め，市場メカニズムの大きな流れに対抗していくためには，共同統治による参加型民主主義の浸透が不可欠なものであるように思われる。

（（株）農林中金総合研究所 常務取締役　原　弘平・はら こうへい**）**

農林中金総合研究所
http://www.nochuri.co.jp/